

## 受賞のことば

諫早 勇一

このたびは日本ロシア文学会大賞をいただき、身に余る光栄です。推薦して下さった方々、選んで下さった方々に厚く御礼申し上げます。

まず選考理由の2に関してですが、前任校の同志社大学が非常に多くのロシア語受講生を迎えることになった功績は、もちろん各々の個性を発揮されつつ、ロシア語教育に情熱をもって臨んで下さった先生方みなさんの功績であり、個人的なものではありません。ただ、1 セメスターで文法の基礎を終えるという、新たなコンセプトの教科書づくりを主導して下さった服部さん、大平さんにはとりわけ感謝したいと思います。

つぎに受賞理由の1に関してですが、助手になった1974年頃、大学院生だった長谷見さんの提案でナボコフの『キング・クィーン・ジャック』のロシア語版と一緒に読むことになり、それを機にナボコフに興味を持つようになりました。ちょうどアメリカの出版社から、これまで入手困難だったナボコフのロシア語小説がつぎつぎに刊行され始めた時期で、新たに読めるようになるナボコフ小説に胸をときめかしたことを覚えています。そんな時代的な特権は自分たちの世代だからこそ持ちえたものでしょう。

しかし、ペレストロイカの時代以降、亡命文学は広くロシア文学者の関心を引くようになり、私は文学から文化へと関心を移して行きました。この分野ならまだ開拓の余地はあると考えたからです。ここでもまた若手に持ち場を追われる日が早くきてほしいと願っています。

最後に3の学会への貢献ですが、理事会に出席するだけだった私が学会に深くコミットするようになったのは、沼野さん、望月さんが会長だった6年間です。気心の知れたお二人にお力添えできることは楽しいことで、事務局を兼任していた2年間も含めて、学会活動に時間を奪われたという恨みはありません。どうか若い世代の会員のみなさんも、これからいろいろなかたちで学会活動に参加していただけたらと思います。